

こうした複雑さも踏まえて、近代をどう捉え、どう位置づけるべきかについては、次章であらためて述べます。ここでは時代区分としての「近代」は、視点によつていくつもの異なる枠組みやスパンで捉えることができることを指摘するにとどめておきましょう。ただ差しあたつて、ごく一般的な次元で世界史を俯瞰する枠組みの通説として、近代の起源をどこに置くかについては、大きく2つの考え方が広く前提とされています。ひとつは前述のように15世紀の後半に起源を置くもの、もうひとつは18世紀末を画期とするものです。何の断りもなく「近代」といえば、漠然としたかたちではあれ、2つのうちのどちらかがイメージされているといつてよいでしょう。

前者、すなわち15世紀の後半に起源を置く考え方は、近代の起点として、ルネサンスや宗教改革、大航海時代の意義が重視されます。いずれも中世のマインドセットを支配した神や教会の権威からの離脱という性格を持っています。またそれらを経て成立する主権国家や絶対王政の成立も近代的な政治体制の起源として位置づけられます。経済的にも15世紀後半からは生産力の持続的な上昇とともにヨーロッパ規模（あるいは大西洋規模）での垂直的な交易関係が成立しました（大航海時代の意義はここにもあります）。当時の先進産業であつた毛織物工業が北西ヨーロッパに集積する一方で、そこで雇用される労働者への食糧の生産が東欧や南欧に集積し、それらが互いに結びついてひとつの資本主義的なシステムが出来上がったとする世界システム論のような見方もこの立場に含まれます。

これに対して後者の考え方は、アメリカ独立革命やフランス革命などの市民革命、18世紀後半のイギリスに始まつたとされる産業革命、政治的共同体としてのネイションの概念の成立とともに近代国家の様式として広まつた国民国家など、より直接的に現代の私たちの生きる社会を構成する制度の形成が重視されます。

Vocabulary:

ランケ	Leopold von Ranke (1795-1886), founding figure in the modern discipline of history
シャルルマーニュ	Charlemagne
甦る	to be resuscitated, to be revived
黎明	dawn (of a new age), daybreak
封建	feudal, feudalism
教皇	the pope, the papacy
俯瞰	panoramic, comprehensive

山下範久 (編著) 『教養としての世界史の学び方』 東洋経済新報社, 2019, pp. 31-37.

Questions:

- a. Why does periodization play a fundamental role in history writing?
- b. What is the basic periodization for world history and when was it developed?
- c. Why is 近代 described as having a 「自己言及的な性格」?
- d. What were the three eras as defined by Renaissance humanists and Protestants?
- e. What do the “Protestant” and “Renaissance” periodization schemes have in common?
- f. What is it that needs to be kept in mind (「留意すべきは」) with regards to the beginning of the modern period?
- g. What is the only way for an 「新しい時代」 to be understood?
- h. What is the relationship between 直近の過去 and 古い過去 as laid out by the author? What is the relationship between 近代 and 古代?
- i. How did the tripartite periodization change in the 19th century?
- j. What years and events are cited as the most common ending points for 古代 and 中世?
- k. List and explain the sub-periods of 中世 as given by the author.
- l. What is the significance of resistance to papal and feudal authority as explained in the text?
- m. Why is the question of when the modern era started complicated?
- n. What are the two most commonly cited starting points for 近代? Identify both the “when” (i.e., the point in time) and the “what” (i.e., the key events or dynamics) that the author cites for each starting point.

(4)

今年（二〇〇五年）は「戦後六十年」ということなのですが、この言葉を使うとき、前提として考えておくべきことが、いくつかあると思います。

一つは、「戦後」を六十年と表現できる国が、はたしてアジアにどれだけあるか、ということです。無論、「戦後」を第二次大戦後と限定すれば、どの国でも六十年なわけですが、「戦後」＝第二次大戦後という国が、アジアにどれだけあるでしょうか。日本の周辺を見ても、朝鮮戦争があったし、ベトナム戦争があった。中国とベトナム、ベトナムとカンボジアの間でも戦争があったし、中国と台湾の間でも軍事的緊張が絶えませんでした。フィリピンやインドネシアでは独立戦争や軍事クーデター、民族紛争があったし、ミャンマーでは今でも軍事独裁政権が続いています。核保有国であるインドとパキスタンの紛争もあった。そういうアジア諸国の状況を見ると、**「戦後六十年」とほとんど自動的に言ってしまうことの特異性を考える必要があるのではないのでしょうか。**

二つ目には、その特異性を考えていくと、日本人にとってもはたして「戦後」は六十年と言えるのか、そのことを検証する必要があると思います。昨年、自衛隊がイラクのサマーワに派兵されました。アメリカ連合の占領軍に自衛隊が参加したことで、日本も

すでに「戦時下」にある。そう考えれば「戦後六十年」という表現はすでに成り立ちません。イラクでは五人の日本人が殺害されています。(注)日本政府がアメリカの侵略戦争をいち早く支持し、自衛隊を派兵することがなければ、五人の死もなかったでしょう。すでに日本も戦争による犠牲者を出しているのです。

さらにイラクに自衛隊が派兵される前は、どうだったのでしょうか。朝鮮戦争やベトナム戦争に対しても、日本は深く関わっていたのであり、米軍の後方支援基地、あるいは出撃拠点基地として、戦争に参加していたと言えるのではないのでしょうか。

確かに「国権の発動たる戦争」は行っていません。しかし例えば、一九六〇年代から七〇年代にかけて、沖縄からB52がベトナムに飛び立ち、爆撃を行っていた。その爆撃を沖縄の基地労働者も支えていました。兵站活動へいたんも戦争への参加であることは軍事的には常識でしょう。そのような状況を見ると、自衛隊が銃をとって戦っていないかからといって、日本は参戦していなかったと言いきれるのでしょうか。

それと関連して三つ目には、「戦後六十年」があたかも憲法九条があったが故に戦争を免れ、日本が平和を保てた六十年であった、とまとめられてしまうことの問題があります。憲法九条をターゲットとして改憲の動きが強まっていることに対して、憲法九条

の意義や大切さを強調するために、この六十年を「平和」な時代であった、と護憲派が強調したりする。あるいは改憲派や右派の側にしても、「平和ボケ」という嘲りあざけの言葉を護憲派に投げつけたりしますが、その言葉自体が逆に示すように、旧ソ連や北朝鮮、中国の脅威を言いながら腹の底では「平和な日本」を右派の側も実感していたのではないのでしょうか。現にその人達は日米安保条約のおかげで「日本の平和が守られた」というような言い方もするのです。

しかし、そういうふうには日本が「平和」だったことが、戦争に加担しなかったことになるのか。日本人が「平和」を享受していたと思いきや、「戦後」が、どのような犠牲によって支えられていたのか。そういうことへの反省が大多数の日本人には欠落しているように思います。日本の「戦後復興」と朝鮮戦争との関係。あるいは、サンフランシスコ講和条約で沖縄を切り離し、施政権返還後も米軍基地を集中させ、日米安保体制の負担を押しつけてきたこと。そのことにどれだけ目を向けているのでしょうか。

「戦後」日本の経済成長によって生活が向上し、それが多くの日本人に「平和」を実感させたと思いますが、その足下に踏みつけられていたのは何だったのか。そのことを忘れて、あるいは意識的に無視して「平和」な時代としての「戦後六十年」を語ること

とは欺瞞さまをに満ちています。「平和憲法」と「日米安保条約」を共存させ、在日米軍の存在によって「国防」予算を抑え、経済成長を優先させる。そのような戦後日本のあり方は、沖縄に在日米軍基地（専用施設）の七五パーセントを集中させること、つまり日米安保体制の負担と矛盾を沖縄に押しつけることによって可能となったのです。

「戦後復興」と高度経済成長を成し遂げた日本の足下に、北朝鮮や韓国、ベトナム、沖縄の犠牲があったことを忘れ、「平和な六十年」と言ってしまうのでしょうか。

そして、四つ目に問われるのは、日本・「本土」・ヤマトウにとっての「戦後六十年」と、沖縄にとっての「戦後六十年」の違いです。六十年経った今も、沖縄島の二〇パーセントという広大な面積を占拠している米軍基地を見ると、沖縄にとって戦争は、あるいは占領は終わったのだろうか、と思わずにおられません。もちろん、法的には戦争も占領も終わっているだろうし、今沖縄で戦闘が行われているわけではない。しかし、六十年前、収容所から村に戻ってみたら、そこは米軍基地として占拠されていた。その後も「銃剣とブルドーザー」で土地を奪われていった。そうやって土地を奪われた状態が六十年も続いています。米軍による事件や事故は現在も後を絶ちません。

昨年きのの八月十三日には、宜野湾市ぎのわんの沖縄国際大学に米軍の大型輸送ヘリコプターが墜

落しました。直後に現場は米軍によって封鎖され、宜野湾市長や大学の学長さえ近づくことができませんでした。沖縄県警の捜査も満足に行えず、治外法権的状况が今も続いていることが露呈ろていしました。しかも、事故の原因も明らかになっていないのに、事故を起こしたのと同型のヘリが普天ふてん基地を飛び立ち、イラクに出撃していった。沖縄の米軍基地からは五二〇〇人の海兵隊員がイラクに派兵され、ファルージャ攻撃の主力となりイラクの民衆を殺戮さつりくしています。

そういう歴史や現実を見ると、沖縄戦の戦闘は終わっても、沖縄はこの六十年ずっとアメリカが行う戦争の渦中にあり、実質的な占領下に置かれてきたのではないか。米兵に強姦ごうかんされて殺された由美子ちゃん(注2)や米軍トレーラーに轢殺れきざつされた国場君こくばらの死。(注3)それは形を変えた「戦争の犠牲者」ではないのか。日本・「本土」・ヤマトウにとつての「戦後六十年」と沖縄にとつてのそれとの間には大きな断絶があり、沖縄にとつて、戦争が終わった後という意味での「戦後」は本当にあったのか、と考えずにおられません。

目取真俊『沖縄「戦後」ゼロ年』日本放送出版協会, 2005, pp. 12-16.

- a. According to the author, what is inadequate about equating 「戦後」 with the Second World War?
- b. What is the second presumption that the author questions with respect to 「戦後」, and why?
- c. How does the Iraq war resemble earlier conflicts?
- d. Translate the sentence 「確かに「国権の発動たる戦争」は行っていません」 and explain what events took place between the 1960s and 1970s that make the author reflect on this statement.
- e. What role does the author claim that the constitution has played in the idea of 「戦後六十年」?
- f. What do 護憲派 and 改憲派 mean, and how does the author summarise each one's position?
- g. What does 「平和ボケ」 mean and what does this phrase show to the author?
- h. What is the author referring to when he writes 「そういうことへの反省」?
- i. What TWO points does the author make with respect to the role of 「経済成長」 in the narrative of 「戦後六十年」?
- j. How does the experience of 「戦後六十年」 in Okinawa compare with that of mainland Japan?
- k. To what does the expression 「銃剣とブルドーザー」 refer?
- l. What happened on August 13th of the previous year?
- m. What did this event reveal about the relationship between Okinawa and the US? What were the implications beyond Okinawa?
- n. What conclusions does the author draw in his closing summary of the history and reality of Okinawa?

END OF PAPER

Page 16 of 16